

## 国語科学習における「わたしの学習」

**テーマ：比較を通して、楽しく読み味わい、伝え合う力を高める。**

### 1. テーマ設定の理由

日本人の活字離れが指摘されるようになって久しい。映像の氾濫などいろいろな要因が重なり合って今日の状況が生まれてきている。また、めまぐるしく変わっていく社会に対応できない大人が増えているのも事実である。言葉から離れていくことで、一部の若者には、社会の変化に対応できないどころか、社会の変化の渦に巻き込まれてただ流されるように生きているといった雰囲気さえ感じてしまう。そういった状況に対して、主体的に対応していける子どもを育てるためには、子どもに自らが自らの思いをうまく表現できる力を持たせなければならない。

そういう現代の子どもたちにとって必要な力は、相手を考えたり目的を考えたりして順序よく話す力、より論理的に筋道を立てて話す力、話したい中心を確実に伝える力、分かりやすい表現で話せる力である。また、相手の願いや経験、気持ちに寄り添いながら、相手が何を言おうとしているのかを察知する力、大事なことを落とさないように聞く力、自分の考えと比べて聞く力である。つまり、「伝え合う力」であり、この「伝え合う力」を高める学習は、生きてはたらく言葉の力を身につける学習であり、今の時代に欠かすことのできない内容と言える。国語科が国語の基礎的・基本的な内容を系統的に身に付けさせる固有の目的をもった教科であるということを考えた時、この「伝え合う力」を高めるということは国語科で担うべき重要な役割であり、私たちがテーマとして位置づけた理由でもある。

### 2. 言葉を大切にす

私たちがテーマについて考える時、言葉を抜きにしては考えられない。私たちが扱う対象が、物語や説明文、作文、漢字、話し言葉といった言葉そのものであり、さらに、それを言葉を媒介として練り合わせていくからである。

言葉は、ただ一つの言葉として存在しているだけではその言葉の持つ意味そのものでしかありえない。それが、ひとたび物語文の中へ入ってしまうと、その言葉の持つ意味が実に多様化する。それは、物語の時代や場所、人物どうしの関係、行動などの条件に左右されるからである。物語の条件が変わることで、同じ言葉がまったく逆の意味にも取れることもあるからである。そういった生きた言葉であるからこそ、物語の時代背景や場所、人物どうしの関係、行動などの条件を常に意識しながら、一つひとつの言葉にこだわり、その言葉を正確に吟味し、その言葉の持つイメージを広げる必要がある。自分の生活経験に照らし合わせることで、さらにイメージを膨らませることができるようになるのである。

### 3. 国語科における比較の利用・効果

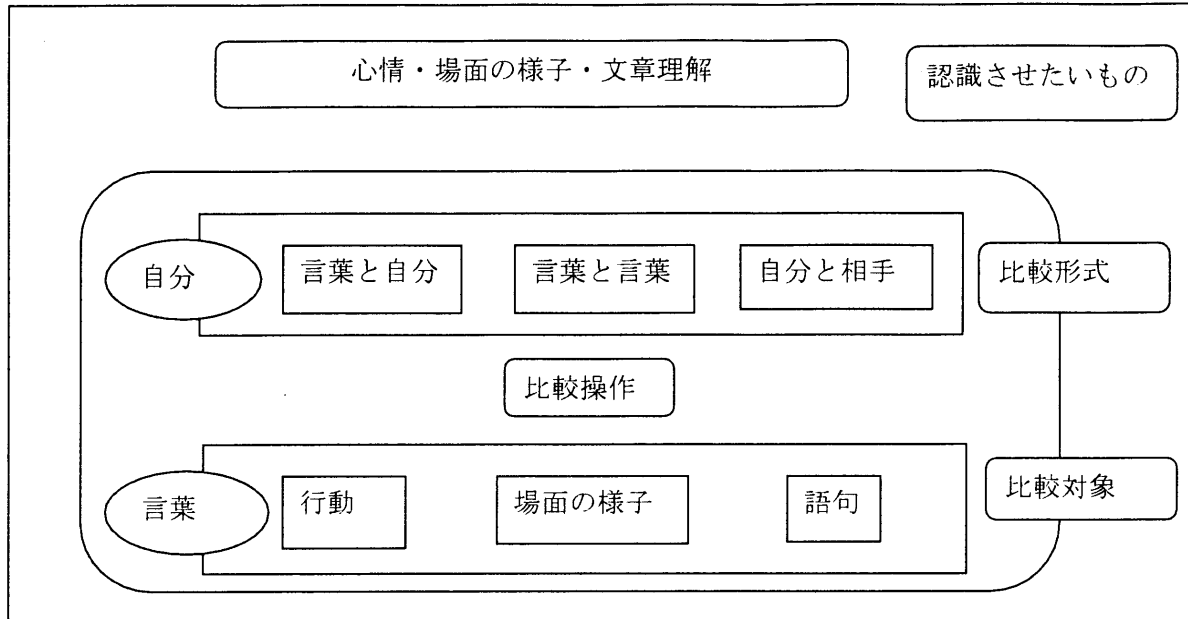
本校国語科では、伝え合う力を高めることを最終の目標とし、そのための方法をいろいろと模索してきた。研究過程で、伝え合いの質を高めるためには、認識力を高めることが不可欠であり、認識力を高めるための研究を行うことで伝え合う力を高められるという考えに至った。

そこで、物事を認識する方法の一つである比較を国語科で有効に利用して、認識力を高め、伝え合う力を高めていこうと考えたのである。

比較は、物の認識力を高めるために用いられる、一般的・普遍的な方法といえる。数量の比較・質の比較・価値の比較など、普段の生活の中で比較を取り入れた物事の認識が無意識のうちになされている。比較によって認識力が高まるのは周知の事実である。

そこで、私たちは、自分の考えを作る過程や伝え合う過程で、「比較」を意識させることにより、どんな場面でも自分の中での比較や自分と相手との考えの比較を行っていくのではないかと、また、そうして比較することにより、より深い認識力が育ち、深い読みが実現できるのではないかと考えた。深い読みが実現することで、本来読みきれなかった読みの楽しさを味わうことができると考えたのである。また、それは、読書の世界を広げる可能性も秘めている。

そうすれば、認識力の高まりが、より深い比較を行える力となっていく。それぞれの力がスパイラル的に高まっていくと考えたのである。



#### 4. 国語科における比較の分類

比較には、大きく分けて次の3つが考えられる。

- ①言葉と自分との比較。
- ②言葉と言葉の比較。
- ③自分と相手の比較。

①は、物語の中に表現されたイメージや意味、題材、主題、思想、物の見方・考え方、発想、主人公の行動などの対象と自分の生活経験の中で獲得してきたその言葉の概念や知識、社会的な規範との比較である。言葉の持つイメージを考え、自分の中で対象についての比較を行う。その言葉を取り囲む物語の背景、条件、順序といったその言葉の回りにある要素を考慮しながら比較を行っているのである。

例えば、「優しさの表れているところ」を見つけるときには、文中の主人公の行動を意識しながら「自分だったら」というように自分の生活経験と比べたり、「普通なら」というように社会的規範と比べたりする。

②は、文章中の語句と語句、行動と行動、場面ごとの様子、物語のはじめと終わりの比較などである。

物語のはじめと終わりの人物の行動を比較することは、時間の変化や条件の変化などにより微妙に移り変わっていく人物の心の変化を捉えるのに有効である。

また、はじめの読みと終わりの読みを比較することで自分の読みの成長にも気付くことができる。

例えば、宮沢賢治の生き方を学んだ後もう一度「やまなし」を読むことで、今まで見えなかった表現のすばらしさや宮沢賢治の生き方に関わっている部分や思いが表れている部分が見えてきて、味わい深い読みができる。その味わいの中には、はじめの読みと比較して成長した読みを感じている自分があるのである。発言には、「前は、かにはやまなしが好きなんだなぐらいにしか考えていなかったけれど、宮沢賢治の生き方を知って、植物も動物もお互いに助け合って生きていくことが理想と言っていた賢治の考え方が、かにはやまなしへの思いに表れていると考えるようになった。」のように、前の考えとどう変わったかを表現できるようなものが目立ってくる。

③は、自分の考えを持ちながら学習に臨む中で、相手の意見を聞く。相手の意見を聞く際、自分の考えと似ているところや違うところを意識することで自分の考えを整理する比較である。比較しながら聞くと聞いたほうがわかりやすいかもしれない。相手の考えを聞いたときに文へ戻り、文と自分の考え、文と相手の考え、そして、自分の考えと相手の考えを比較する。そして、相手の意見も生かしながら新たに自分の考えを創りあげていく。

友達の意見を意識させることで、例えば、「みんなの意見を聞いていて思ったことは」、「～君に付け足して」、「～さんに賛成で」、「～さんとよく似ているんだけど」、「そこまでは賛成なんだけど、～には反対です。」のようなつなぎ言葉が見られるようになってくる。

①～③のどの比較にも共通することは、比較する過程において、自分の生活経験や社会的規範といった自分が物を考える時のよりどころ（観点）をもって比較しているということである。

## 5. 比較を意識した伝え合いの場を

伝え合いでは、相手によく分かるように伝えるために、何をもとにしたのかという観点を示しながら比較し伝える機会を多くすればするほど、お互いが対象をより深く認識していけると考えた。

話し合いの際、①の発問の場合なら、「ふつう、～は～だけれど、この登場人物は～だから優しいと思います。」や、「もし、自分なら～しているけれど、～は～だから自分の考えを貫く人だと思います。」のように、「ふつうは」とか「自分なら」とか、自分の生活経験の中から創りあげられた自分なりのものの見方・考え方と比べての発言を期待できよう。

話を聞く側からすれば、話す側の、対象についてどんな観点を比較をし、自分のどんな生活経験からどう思うかを明らかにする発言は、話す側の認識力を高めるだけでなく、聞く側の認識力をも高めることにつながる。そうであるからこそ、普段の伝え合う学習の場から、比較を意識した発言をする習慣を付けておきたいものである。

そこで、②の発問を多く取り入れるようにすれば、比較する観点を決める力や伝える言葉の中に比較対象を明らかにしながら論理的に話せるような力がつくのではないかと考えた。②の発問なら、話す側は2つの対象のどの観点をどう比較し、どう明らかにしているのかを話さなければ答えることができないからである。②の発問を多くとれば、比較をする習慣が付き、認識力が高まり、その力が、①のような発問に対しても、比較を意識しながら発言ができるようになっていくと考えたのである。

このように、国語科では、言葉にこだわり、比較を意識させることで、教材とじっくり向かい合い、相手の考えをじっくり聞き、お互いの意見交換をより質の高いものにしていこうと考えている。そうして、お互いの読み取りのよい点悪い点を指摘し合いながら、より深く物事を認識していき、質の高い伝え合いのできる学級集団を創りあげていきたいと考えているのである。